RIVER FUND

河川基金だより

川を愛する人のために

河川基金

2019
April

Vol. 40

公益財団法人
河川財団

次世代に伝えて・つなぐ 多自然川づくり

自然と暮らしを考える研究会（佐賀県唐津市）

「自然と暮らしを考える研究会」は、平成 8 年に活動をはじめ、これまで延べ 7 基の水車を復元するなど、地域の自然や歴史、文化を 21 世紀に向けて継承する活動を行っています。

平成 29 年度は、厳木川と水車の回る用水路一帯において、水辺と田んぼの景観保全と水辺の多面的な機能を学ぶ活動として、河川（水辺）と田んぼをフィールドとした子どもたちの体験・環境学習支援や環境整備、指導者育成等の事業を実施しました。
今後は、近年多発する異常気象に備え、土砂・水災害から「命」を守るための「地域防災」について、これまでの事業で身に付けた経験を地域社会に向けて発信します。

河川基金は、川づくり団体「自然と暮らしを考える研究会」を応援しています。

【写真】水辺に回る水車の役割と田んぼのいきもの観察会

河川基金へのご寄付は
全国の川をより良くする活動へと
つながっています。

河川基金

TOPICS

04 2019 年度「河川基金」新規助成案件を採択決定しました

07 平成 30 年度 川づくり団体全国事例発表会
- 活動の持続可能性や発展を目指して -

09 平成 30 年度 河川教育研究交流会
- 学校における河川教育と子供たちの変容 -

INTERVIEW

河川基金助成の現場から

河川基金だよりでは、様々な川づくり活動に取り組む皆さまにとって、その活動の参考となるような Good Practice についての情報発信と共有を目指していきます。

今回は、河川基金を活用して全国各地で活動されている方々のなかで、下記の方々からその活動の様子やメッセージをお聴きしました。

11 河川財団奨励賞 受賞研究
- 河口域を対象とした環境保全・自然再生のための河川改修技術の構築 -
東京工業大学（神奈川県） 環境・社会理工学院 助教 厳島 怜 さん

14 大河津分水を人々へ広める
- 川に親しむ、川や地域に関心を持つ -
Love River Net（新潟県） 代表 樋口 勲 さん

17 「地域の川『七北田川』を知ろう」で深い学びを実現
仙台市立北中山小学校（宮城県） 教諭 木村 千春 さん 教諭 今野 友明 さん
カワラバン（宮城県） 代表 菅原 正徳 さん

20 現場の問題解決が研究への原動力
- アユ産卵場の形成 -
高知工業高等専門学校（高知県） 准教授 岡田将治 さん

INFO

23 御礼 ご寄付の御礼

23 紹介 河川基金ウェブサイトをご活用ください

表紙写真
大河津分水タオルを掲げて大河津分水ウォーキングスタート！
【提供：Love River Net】

TOPICS

2019年度「河川基金」の新規助成案件を採択決定しました

特徴的なものを部門ごとにいくつかご紹介します

河川財団では、このたび、2019年度の河川基金助成事業の新規案件として237件を採択決定しました。今年度の河川基金助成事業への応募状況と採択状況をご紹介します。

2019年度の河川基金助成事業に全体で423件の申請を頂きました。これは、昨年度の申請数361件（研究者・研究機関部門175件、川づくり団体部門143件、学校部門43件）を大きく上回っています。

多くの方々から申請いただきまして誠にありがとうございました。

2019年度
申請数　合計423件
採択数　合計237件

2019年度に採択された案件の中から特徴的なものを部門ごとにいくつかご紹介します。

【研究者・研究機関部門】

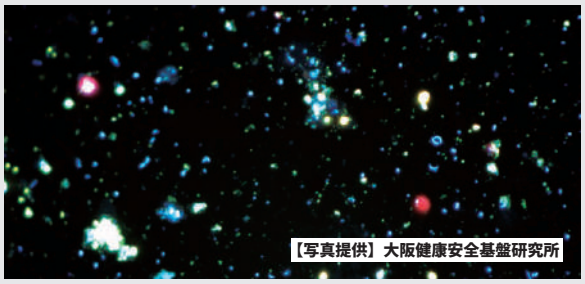
「研究者・研究機関部門」では、研究の目的や成果が「川づくり」や河川管理に、どのように貢献し活用されると期待されるかを重視して助成しています。今年度は87件を採択しました。

①一般研究者・研究機関

工学・自然科学分野では、「川づくり」への貢献に加え、独創性や発展性についても評価して採択しています。例えば、九州大学・矢野真一郎教授の「気候変動の影響を考慮した流木リスク評価手法の開発」は、気候変動による洪水時の流木量の変化に伴う流域内での被災リスク評価を行う研究であり、今後の発展性が評価されました。また、名古屋大学・中川書子准教授の「大気硝酸濃度を指標に用いた河川環境における窒素浄化能の

研究者・研究機関部門

河川や流域に関係する調査・研究を行う、研究者や研究機関への助成


【写真提供】大阪健康安全基盤研究所

区分	採択数	合計
一般研究者・研究機関（うち社会・人文、文理融合系）	64（12）	87
アウトリーチ活動・学術図書出版	3	
若手研究者	11	
ジュニア研究者	9	

川づくり団体部門

河川や流域への理解を深めたり、健全な姿に変えるための活動などを行う市民団体等（川づくり団体）への助成

【写真提供】全国川ごみネットワーク

区分	採択数	合計
全国・流域川づくり団体	79	81
新設川づくり団体	2	

学校部門

学校教育現場で、河川・流域を通じて防災や環境等を学習する河川教育に取組む、小・中・高校等への助成

【写真提供】東北町立甲地小学校

区分	採択数	合計
幼稚園、保育所、認定こども園等	4	69
小、中、高等学校、特別支援学校等	65	

高確度評価方法の開発と検証」の研究は、河川からの脱窒量を推算する新たな手法の提案となっており、有用な科学的知見を得る可能性があると評価されました。

また、社会科学・人文科学等の研究や文理融合系の研究にも幅広く助成しています。採択事例としては、東京大学・渡部哲史特任講師の「水害が過疎化の進展に及ぼす影響の解明」は、水害の長期的影響を明らかにし、地域の過疎化を考える独創的な研究であるとして採択されました。

②若手研究者

研究経験の少ない若手研究者（35歳以下）が、研究者として良いスタートを切れるように、優先的に助成を行っています。採択事例としては、富山大学・太田民久特命助教の「ウロコのストロンチウム同位体比を用いた河川魚類の行動履歴推定」は、新しい調査手法であり、成功すれば魚類調査方法に大きな進展をもたらす可能性が評価されました。

③ジュニア研究者

ジュニア研究者への助成では、未来を担う中学生・高校生のクラブ活動を支援しています。採択事例としては、札幌市立札幌旭丘高等学校の「自然界の薬剤耐性菌を探せ！Ⅲ～トンボと河川を巡る耐性菌～」があります。この研究は、生き物を育て「命」の大切さを学びながら、河川環境の最先端科学に挑むものであり、教育はもちろん学術的価値も高いことが評価されました。

④アウトリーチ活動

「アウトリーチ活動」では、一般市民の方々が川に関する研究への興味・関心を持ち、理解を深めて頂くことを目指して、研究者等が実施する公開プログラム、出前授業といった活動への助成を行います。今年度は、小学生を対象としたアウトリーチ活動も採択しています。事例としては、柿田川生態系研究会・加藤憲二名誉教授の「柿田川生態系研究会（サマーサイエンススクール、柿田川シンポジウム）」があります。

【川づくり団体部門】

「川づくり団体部門」では、「川づくり」への貢献が期待できるか、自らの活動を継続的に展開してゆくために資金確保や後継者育成が行われているか、といった点を重視して助成しています。今年度は81件を採択しました。

①全国・流域川づくり団体

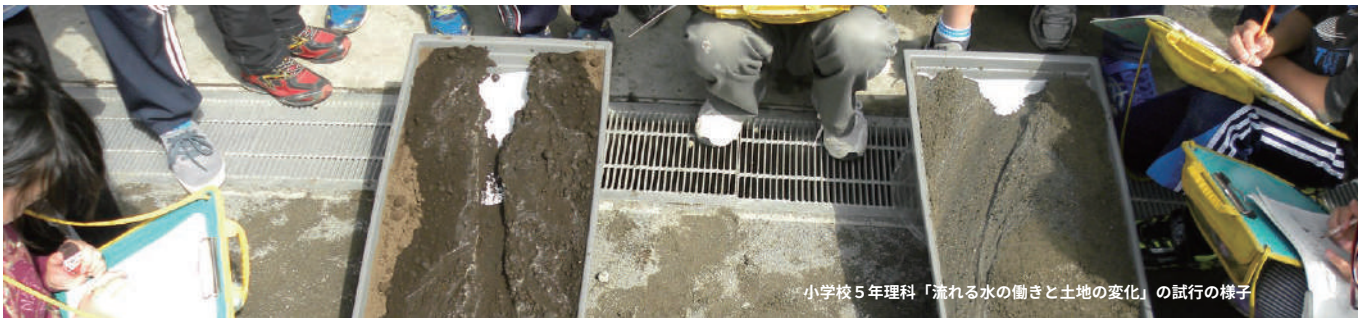
全国規模あるいは流域規模で、川や流域をより健全な姿にするための活動へ助成を行っています。採択された事業の中から河川や流域への理解を深める活動や、川を活かした地域づくりの活動の事例をいくつか紹介します。

NPO法人まち・川づくりサポートセンター（後藤登理事長）の「石狩川流域住民の夢の実現『かわたび』」は、異業種交流のネットワークを活かし、川下りなどの水辺空間を活用する体験型観光と教育プログラムをとりいれたリバーツーリズムのモデル事業を行うものです。

②新設川づくり団体

設立から5年以内の新しい川づくり団体を対象に、団体の活動が、円滑に軌道に乗るよう支援をします。今年度は、印旛沼流域の魅力や可能性を分かり易く伝え、市民や事業者の主体的な活動を促すための情報プラットフォームの構築を目指す印旛沼とゆかいな仲間たち（浜田靖彦代表）の「まるごといんばぬま」など、2件が採択されました。

なお、掲載依頼を受けた各地で開催する様々なイベントの情報は、河川基金のホームページ「助成事業者からのお知らせ」コーナーに掲載されますので、興味のある方やお近くの方は是非ご参加ください。


小学校５年理科「流れる水の働きと土地の変化」の試行の様子

【学校部門】

「水」と深く関わる「川」や「流域」を素材に、環境、防災、歴史・文化などの学習を行ってゆく取り組みのことを「河川教育」と呼んでいます。このような、「水」や「川」あるいは「流域」を学習素材とすることは、子どもたちの感性や理性を様々な面から育むことに役立つと考えられます。「学校部門」では、この河川教育を学校教育の現場に採りあげ、実践する活動へ支援しています。今年度は、河川教育の目標に「子どもに育成したい力」が明確にされているかを重視しまして、69件を採択しました。

①幼稚園、保育所、認定こども園等

幼稚園、保育所、認定こども園等への助成では、豊かな自然が残る小貝川とその河川敷で四季を通した体験活動を行うラ・フェリーチェ保育園の「四季の小貝川保育園４」など４件が採択されました。

②小、中、高等学校、特別支援学校等

小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等に対する助成では、教科学習、総合的な学習の時間等における河川教育の実践と研究を支援しています。今年度は65件が採択されました。採択された事業の中から子どもの発達段階や地域の特性に応じた河川教育の取り組みをいくつか紹介します。高鍋町立高鍋西小学校の「大すき高鍋の自然Ⅰ・Ⅱ」では、3年生の総合的な学習の時間を使って、高鍋湿原の自然を守っていこうとする心情と態度を育てていくことを目指しています。岐阜市立岐阜小学校の「長良川学習」では、歴史、文化、自然の宝庫である長良川と自ら進んで関わることを通して、自己を高めようとする子を育成することを目標に、５年生の総合的な学習の時間を核に、地域に根差した長良川の鵜飼いや鮎の学習を行います。

また、「河川教育とりくみ支援」では、河川教育の導入を目指す学校において、「先進校の視察」「河川教育の指導方法の研修」「水辺での体験活動の試行」など河川教育に取り組むための準備活動を支援しています。今年度は15件が採択されました。

今回は、２０１９年度に新たに助成採択された研究や活動の一部をご紹介しました。詳細につきましては、河川基金のホームページ「採択一覧」をご覧ください。

今後も助成事業者の方々をはじめ、幅広く皆様のご意見を伺いながら、河川基金助成事業が多くの方々に活用され、人々の河川への理解が深まり、人と川との良好な関係が築かれるよう努めてまいります。

【助成事業者の皆様に、事務局からのお願い】
河川基金の名称・ロゴマークの表示

河川基金の助成により実施された研究や活動は、各種印刷物やイベント会場の看板などに「河川基金の助成を受けている」旨とロゴマークの掲示を行うようお願いします。

河川基金ロゴマークは河川基金ホームページからダウンロードできます。

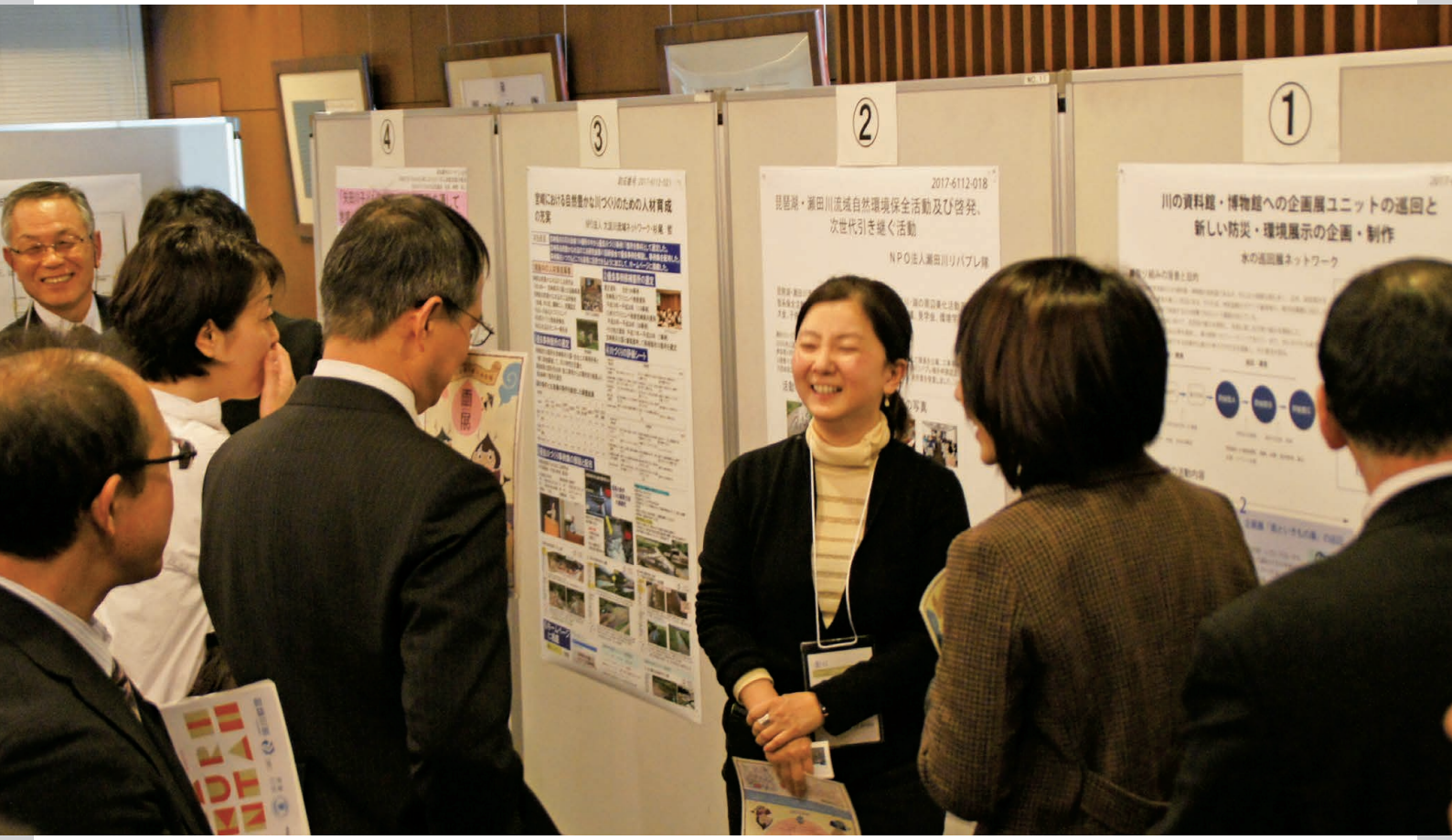
【事務局の連絡先】
公益財団法人河川財団　基金事業部
TEL　03-5847-8303
FAX　03-5847-8309
URL：http://www.kasen.or.jp/kikin/
問合せ先：kikin-toi @kasen.or.jp

河川基金

TOPICS

平成 30 年度 川づくり団体全国事例発表会

- 活動の持続可能性や発展を目指して -



2 回目となるポスターセッションを開催し、多くの川づくり団体の課題である「メンバーの高齢化」や「参加者集めの秘訣」などについて情報交換がなされた（平成 30 年度　川づくり団体全国事例発表会）

平成31年1月27日東京大学小柴ホールにて、川づくり団体全国事例発表会が開催されました。平成29年度に河川基金助成事業を完了した川づくり団体の中から、特に優れた6団体より発表をいただきました。

新たな川づくりへのヒント

リバーサイドのリノベーションを紹介いただいた環境文化研究所の田中謙次さんからは、リバーシェアリングエコノミーの社会実験として、河川敷を一ヶ月借り切り公共テーブル「6P Gazebo」を設置する試みを紹介いただきました。その取り組みをさらに発展させたリバーサイドの活用事例と、場づくり人づくりに成功した多くの事例をご紹介いただき、新たな川づくりへのヒントとなりました。

学校をサポートする川づくり団体の取組

学校の総合的な学習のサポートをされている e-plus 生涯学習研究所の小林由紀子さんからは、環境学習の授業やプロジェクトWETを取り入れた授業の様子が紹介されました。子どもたちの目線から感じ取れる水環境教育の授業は、自分だけ気を付ければいいというものではなく「繋がっている」という大きな気付きを与えているようです。

長期の活動が意欲的な学びへ

筑後川をまるごと博物館運営委員会の鍋田康成さんからは、久留米大学を会場として行われ今年で19年目を数える市民公開講座の紹介やリバーツーリズム、子どもたちの環境体験学習について発表がありました。子どもたちの学びが続くようにと連続講座を開催し、長い目で見守ることで意欲的な学びへと変化した事例はとても印象的でした。

来賓挨拶
国土交通省 水管理・国土保全局 光成政和 河川環境課長

平成 30 年度 川づくり団体全国事例発表会　優秀成果賞　一覧　（順不同、敬称略）

平成 29 年度に完了した河川基金助成研究のうち、優秀な成果を表彰するもの。
今年は 9 名の受賞者が表彰されました。

所属機関名	代表者	助成事業名
特定非営利活動法人 はちろうプロジェクト		八郎湖および流入河川における体験型環境学習「八郎湖　水と生きものの学び」の活動
日本河川・流域再生ネットワーク		水辺の「小さな自然再生」現地研修会による川づくり人材育成
次世代のためにがんばろ会		魅力的な水辺活用・地域活性化プログラム
特定非営利活動法人 暮らし・つながる森里川海		馬入水辺の楽校及び地域の自然環境の保全と環境教育活動の推進
特定非営利活動法人 ｅ-ｐｌｕｓ生涯学習研究所		水環境学習の体系化　体験学習のための教材作り
一般社団法人環境文化研究所		川まち！おしゃれな水辺空間
Love River Net		信濃川・大河津分水における自立型川づくり事業キックオフプロジェクト
特定非営利活動法人 大淀川流域ネットワーク		宮崎における自然豊かな川づくりのための人材育成の充実
筑後川まるごと博物館運営委員会		筑後川をまるごと学ぶ人材育成活動

ポスターセッション

また、今年で2回目となるポスターセッションは、全国レベルの情報交換の場として定着し、大変有意義な時間となりました。

来年度はさらに皆様の活動の輪を広げるお手伝いが出来るよう務めてまいりたいと存じます。

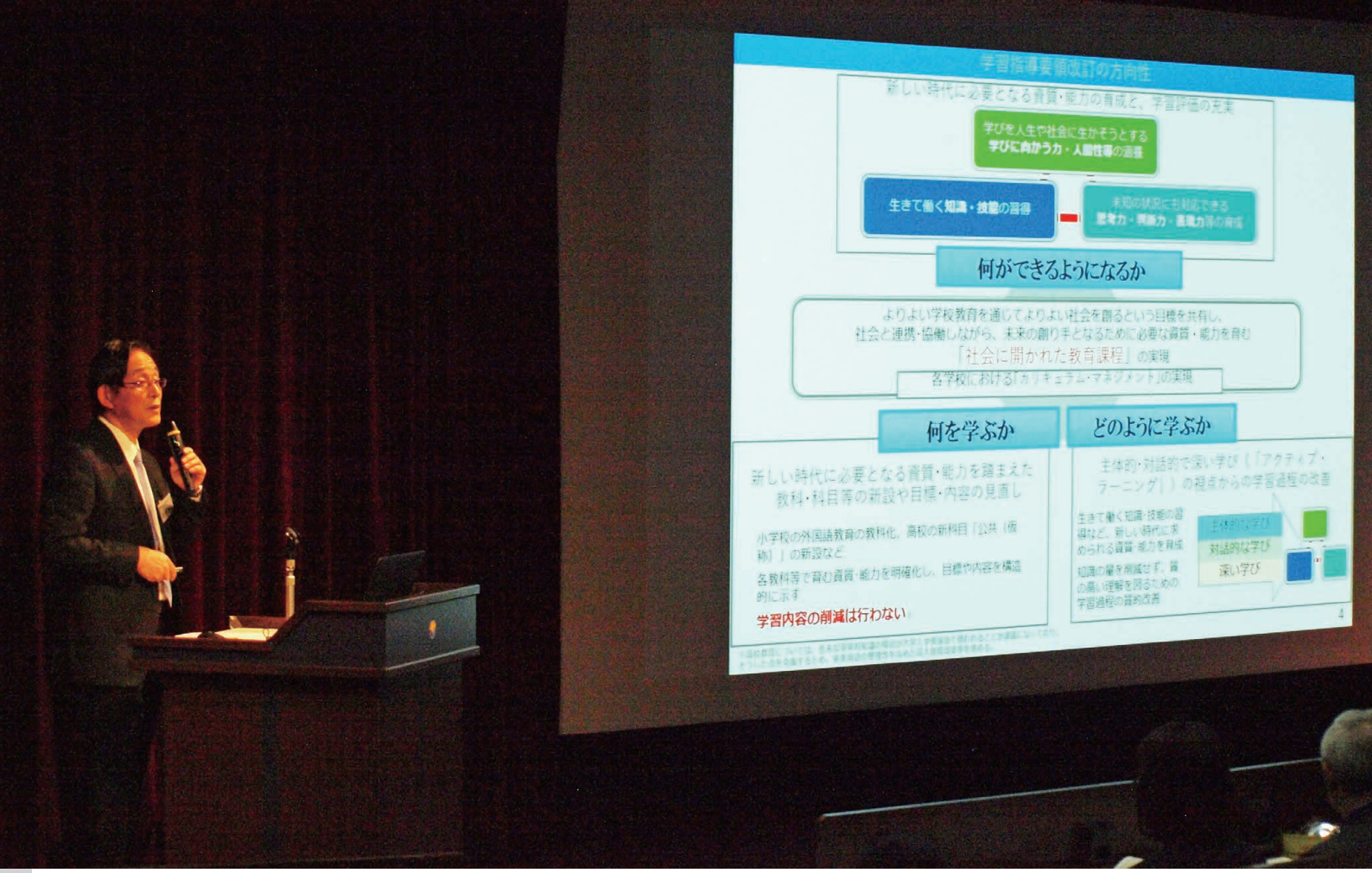
1 優秀成果賞に選ばれた団体による口頭発表の様子
2 平成 30 年度 川づくり団体全国事例発表会 表彰式

令和元年度「川づくり団体全国事例発表会」開催のお知らせ

平成 30 年度河川基金助成事業を終えた川づくり団体部門発表会を開催予定です。是非多くの皆さまにご参加いただき、活用していただければと存じます。

令和元年度 川づくり団体全国事例発表会
人々の河川や流域への理解を深め、川を健全な姿へ変えるための活動などを行う市民団体（川づくり団体）の助成事業の成果発表等を行います。

開催日　令和 2 年 2 月 9 日（日）
場所　東京大学　山上会館
参加費　無料



文部科学省　初等中等教育局　清原洋一主任視学官による講演「これからの河川教育の展開」

TOPICS

平成 30 年度 河川教育研究交流会

- 学校における河川教育と子供たちの変容 -

平成31年1月26日、平成最後の発表会「平成30年度河川教育研究交流会」が東京大学小柴ホールにて開催されました。年々参加者が増加し、今年度参加者は135名を数え、大変多くの皆様にご参加いただきました。今年度は文部科学省初等中等教育局 主任視学官の清原洋一様に「これからの河川教育の展開」と題してご講演もいただき、学習指導要領改訂を踏まえた河川教育の展開のありかたについてお話しをいただきました。

例年、優秀成果表彰を受けた6つの団体さんから口頭発表を行っていただいております。今年度は保育園・幼稚園から高等学校まで様々なカテゴリーから発表いただき、子どもの成長段階における環境教育の違いが比較できました。成長段階に応じた子どもたちの変容も、大きく変化していることは大変興味深く、高等学校教諭からは、河川教育が子ども達の進路にも影響を与えた事例も紹介されました。今後は幼児期から児童期そして学童期へと環境教育の連携が必要と感じました。

パネルディスカッションでは、関西福祉大学 金沢緑教授をコーディネーターに迎え、全国レベルの情報交換の場となり、大変有意義な時間となりました。交流会から少しでも情報を得ようと、積極的に質問をされる熱心な先生方の姿が印象的な発表会でした。

後日、ご参加いただいた先生方からは、期待以上の成果を持ち帰ることができましたと嬉しいお言葉を多数いただきました。お忙しい中、多くの皆様のご来場、誠にありがとうございました。

平成 30 年度 河川教育研究交流会 表彰式

平成 30 年度 河川教育研究交流会　優秀成果賞　一覧　（順不同、敬称略）

平成 29 年度に完了した河川基金助成事業学校部門のうち、優秀な成果を表彰するもの。
今年は 15 名の受賞者が表彰されました。

所属機関名	助成事業名
広島市立中野東小学校	ザ・瀬野川プロジェクト
ラ・フェリーチェ保育園	四季の小貝川保育園 2
多摩市立連光寺小学校	川は自然の宝箱　～わたしたちと多摩川～
日の出町立平井小学校	平井川にすむ水生生物や野鳥の観察
学校法人ろりぽっぷ学園　ろりぽっぷ泉中央南園	身近な川との触れ合いの中でふるさとを大切にする心を育む
学校法人ろりぽっぷ学園　ろりぽっぷ幼稚園・保育園	川を身近に感じ、自然の神秘さを感じる事業
川崎市立上丸子小学校	「多摩川」を題材とした子どもたちの体験学習活動「上丸子多摩川カリキュラム」の推進
東北町立甲地小学校	甲地あおぞら水族館２０１７
仙台市立北中山小学校	「 地域の自然とふれあおう 」における体験活動の推進
邑楽町立中野東小学校	自然と人間　①足尾の今を見つめて　②渡良瀬遊水地の自然から
府中市立四谷小学校	総合的な学習の時間　3 学年　多摩川名人になろう
熊本市立城南中学校	自然探求コース
学校法人 大阪初芝学園　はつしば学園小学校	狭山池ダムを核とした学校と地域との絆プロジェクト
兵庫県立浜坂高等学校	岸田川河川調査
宇城市立海東小学校	ふるさとの川に学ぼう～川の恵みに気づき、伝える教育活動～

1 優秀成果賞に選ばれた助成者を交えてのパネルディスカッションの様子
2 優秀成果賞 表彰式の様子

令和元年度 河川教育研究交流会

平成 30 年度河川基金助成事業を終えた学校部門発表会を開催予定です。
是非多くの皆さまにご参加いただき、活用していただければと存じます。

令和元年度 河川教育研究交流会
学校教育の現場において、河川・流域を通じて防災や環境などを学習する「河川教育」に取り組む幼稚園･保育園、小学校、中学校、高等学校の助成事業の成果発表会を開催いたします。

開催日　令和 2 年 2 月 8 日（土）
場所　東京大学　山上会館
参加費　無料

INTERVIEW

河川基金助成の現場から

河川財団奨励賞受賞研究

- 河口域を対象とした環境保全・自然再生のための河川改修技術の構築 -

東京工業大学（神奈川県）　環境・社会理工学院　助教　厳島 怜 さん

良好な汽水環境が残る長崎県加椎川

平成 29 年度の「河川財団奨励賞」を受賞された東京工業大学　環境・社会理工学院　助教　厳島 怜さんに、今回の受賞対象となった研究の概要や成果、河川基金への期待、今後の様々な活動への抱負などをお聞きしました。（河川財団奨励賞は、河川基金助成を受けられた研究者のうち、今後の活躍が期待される優秀な若手研究者を表彰するものです。）

受賞した研究の概要

陸域と海域の境界に位置する河口域は、陸水と海水が混合し、更に、上流域の人為的改変による影響を集積するため、複雑な環境となっています。汽水環境に耐え得る特有な種が生息する場である一方、多くの河口域が開発等により改変されています。受賞対象となった研究では、河口域の生態系と生息場の物理環境及び河道の構造の関係を明らかにし、河川改修の際に配慮すべき事項を提案しました。

河口域で実施した貝類相、生息場の物理環境、河道特性の調査結果を基に、解析を行った結果、生物相や物理環境が、河川、波浪、潮汐の外力により類型化され、類型毎に貝類相に影響を及ぼす物理的要因が異なること、貝類相と物理環境の類型を比較することで、人為による環境改変を抽出可能であることを明らかにしました。また、河道特性と貝類相の関係から、河川改修に際して貝類相保全のために配慮すべき事項について提案を行っています。

河川工学を専攻した理由

私の出身地は、千葉県船橋市の郊外で比較的多く自然が残っているところでした。幼少期には谷地と呼ばれる湿地や川が遊び場でしたが、私が小学校高学年の頃、鉄道建設や宅地開発によってそのような場が徐々に失われていきました。自

河川財団奨励賞受賞研究

- 河口域を対象とした環境保全・自然再生のための河川改修技術の構築 -

東京工業大学　環境・社会理工学院　助教　厳島 怜先生の取組み

源流から沿岸域に至る流域圏をフィールドに水災害、河川生態系、河川地形に関する研究に取り組んでいます。現在は、3つの研究テーマに重点的に取り組んでいます。1つは、河川汽水域に関する研究で、人為的インパクトが河川汽水域の環境構造及び生態系に及ぼす影響について研究しています。2つ目は、流域内の自然微地形や過去の治水システムが氾濫被害に及ぼす影響に関する研究で、久慈川流域を対象に現地調査や氾濫計算を行っています。3つ目は、山地源頭部の河床形態に関する研究で、土砂生産領域における河道特性について地形測量を行い基礎的な知見を集積しています。

身の成長とともに、子どもの頃遊んだ自然あふれる場が消えつつあることに寂しさを覚え、環境問題や遊び場であった川に関する分野に興味を持ちはじめました。幼少から自然に囲まれた環境におり、よく川に入って遊んでいたので、河川工学は一番身近な分野だったのかもしれません。

国土交通省から研究者の道へ

大学4年生の頃、鹿児島県川内川で大きな水害があり、私は災害ボランティアとして現地で復旧作業を手伝いました。そこで、災害の凄惨さや自然の力強さを目の当たりにし、防災の重要性を強く感じました。環境だけでなく、災害対策も含めて国土構築に貢献したいと考え、国土交通省へ就職しました。国土交通省には5年間在籍し、現場での治水事業に関する業務、本省で河川計画の策定に関する業務に従事していました。一方で、自分の中では河川の環境問題や水害の発生要因等、現象解明への興味が大きくなっていき、研究者への道へと方向転換しました。また、災害や河川環境に関する課題は河川内で解決できないことも多く、流域を対象とする必要があります。より広い視野で河川の問題を考えたいと思ったのも研究者になったきっかけです。

研究テーマ

源流から沿岸域に至る流域圏をフィールドに水災害、河川生態系、河川地形に関する研究に取り組んでいます。極力限定したテーマで研究を進めるのでは無く、常に広い視点で物事を捉えるよう心がけています。現在重点的に取り組んでいるテーマは、河川汽水域の環境構造に関する研究に加え、流域内の自然微地形や過去の治水システムが氾濫被害に及ぼす影響に関する研究、山地河川の河床形態に関する研究です。源流から河口域を対象に、環境及び防災に関する研究テーマに取り組むことで、より幅広い視点から流域圏について考えられるようにしています。

受賞の対象となった河川汽水域の環境保全に関する研究は、欧米、豪州、南アフリカと比較して日本は遅れています。陸域、海域両方からの影響があり、上流域の人為的影響を集約する場ですから、現象は複雑です。一方で、難しいこそやりがいがある分野です。研究者間の繋がりも重要で、汽水域の生態系を長年研究されてきた九州大学の鬼倉先生、福岡工業大学の乾先生、熊本大学の小山先生にアドバイスをいただけたことも受賞に繋がったと感謝しています。

研究内容が実際の現場にどういかされているのか？

本研究では、河口域の環境を評価する際の類型化の提案、河口域の陸域の生息場構造と河道特性との関係を明らかにすることができました。研究成果の一部は現場に適用可能なものもありますが、環境に配慮した河道改修技術として確立するためには、河川水中の環境評価や、提案した改修方法が維持管理や治水の観点で問題がないかを検証する必要があります。一方で、事例の蓄積も重要です。研究で得られた知見に基づいて河川改修を行い、その結果をモニタリングし、フィードバックすることで技術が確立されると思います。現場での実装を踏まえた研究の展開もしていきたいと考えています。また、河川財団の助成では、研究成果が研究者だけでなく、技術者や行政の方にも伝わりますので、実装に近くづく良い機会だと思います。

これからの目標／今後に取り組みたい事

これまで、河川環境や水災害に関する研究を行ってきましたが、それぞれ異なる現場で研究を実施しており、独立したテーマとして扱ってきました。しかし、「自然環境と人間社会が調和した国土」を構築するためには、

河川財団奨励賞受賞研究

- 河口域を対象とした環境保全・自然再生のための河川改修技術の構築 -

環境と防災を流域圏で融合させる方策を考える必要があります。そのためには、河川や流域の自然メカニズムに対する更なる理解、自然地形や環境と人間社会及び生態系の関係の解明が必要だと考えています。

現在、氾濫原を対象に、大規模水害に対する浸水リスクの低減や氾濫流のコントロールを目的とし、過去に構築された治水システムの解明、自然微地形と集落発達の関係、また、それらが浸水プロセスや浸水リスクに及ぼす影響について研究を行っています。一方で、氾濫原における水害対策の構築に際し、生態系の保全や再生を包含させた対策とすることが重要と考えています。日本では、氾濫環境に適応した生物が多く存在していますが、氾濫原の浸水頻度が減少した現在では絶滅の危機に瀕しているものも多くみられます。旧河道や後背湿地を洪水の貯留空間として活用することや、浸水許容の治水対策を行うことは、氾濫原環境に依存する生物の生息場保全の観点からも重要です。自然微地形や過去の治水システムが生態系に及ぼす影響を解明し、水害抑制の観点だけでなく、生態系の保全、保全を包含した対策を構築していきたいと考えています。

若手研究者へのメッセージ

一若手研究者として感じることは、我々を取り巻く環境は厳しく、研究を続けていくためには、より短い時間で、より多くの研究成果を出すことがこれまで以上に求められているように感じます。しかし、重要なのは、成果を出すこと以上に、興味あることを探求する姿勢を貫くことだと思っています。研究者になった皆さんは、研究対象となるもの、或いは、研究するという行為が好きで研究者という道を選ばれたのだと思います。私は、そこに強いこだわりがあれば、多くの困難を乗り越えられると信じて研究をしています。私の場合は、川やそこに棲む生き物、或いは自然を調べるということが好きですので、現場に行き、対象を観察することを最も重視しています。研究のアイデアが生まれるのも、現場で調査している時間です。

厳島 怜　Rei ITSUKUSHIMA

東京工業大学　環境・社会理工学院　助教

1984 年千葉県生まれ。自然環境と人間社会が調和した国土構築に貢献するため、源流から沿岸域に至る流域圏をフィールドとし、水災害、河川地形、河川生態系に関する研究を行っている。

【学歴】
2007 年九州大学工学部地球環境工学科卒業。2009 年九州大学大学院都市環境システム工学専攻修了。2013 年博士（工学）。

【職歴】
2009 年　国土交通省にて治水事業の設計・施工、防災に関する海外プロジェクトの推進、河川計画の策定に関する業務に従事
2014 年　九州大学　助教
2019 年より現職

【受賞】
2014 年　応用生態工学会最優秀ポスター発表賞
2017 年　河川財団河川基金研究優秀成果賞

【所属学会】
土木学会、応用生態工学会、日本地理学会

【主な執筆論文】
・Itsukushima et al. (2019) Effects of sediment released from a check dam on sediment deposits and fish and macroinvertebrate communities in a small stream. (Water)
・Itsukushima et al. (2019) Relationship between physical environmental factors and presence of molluscan species in medium and small river estuaries. (Estuarine, Coastal and Shelf Science)
・Itsukushima (2018) Countermeasures against floods that exceed design levels based on topographical and historical analyses of the September 2015 Kinu River flooding. (Journal of Hydrology: Regional Studies)
・Itsukushima (2018) Study of aquatic ecological regions using fish fauna and geographic archipelago factors. (Ecological Indicators)
・Itsukushima et al. (2018) Investigating the Influence of Various Stormwater Runoff Control Facilities on Runoff Control Efficiency in a Small Catchment Area. (Sustainability)

信濃川大河津資料館内でのイベント（おいらん衣装展示・体験）

INTERVIEW

河川基金助成の現場から

大河津分水を人々へ広める

-川に親しむ、川や地域に関心を持つ-

Love River Net（新潟県）

代表　樋口 勲 さん

大河津分水を人々へ広める

大河津分水を主な活動拠点としているLove River Netは、2014年に設立されました。そのきっかけは、Love River Netの代表である樋口勲さんが信濃川大河津資料館に勤務し、大河津分水の歴史や仕組みに触れたことから始まりました。

ある時、新潟駅前で街頭インタビューをした際、大河津分水の名前は知っているが、どこにあり、どんな役割があるか等、その中身を知らない方が非常に多いことに危機感を抱きました。大河津分水は、歴史もあり先駆者の苦労により作られた郷土の宝もの。新潟の発展の礎を築いたといっても過言ではない程です。その恩恵も非常に大きく、現在の私たちの生活も支えてくれています。それを是非多くの人々へ伝えたいと思いましたが、当時、一般市民が参加しやすい活動をしているところは見当たりませんでした。それなら自分たちで一から始め、新たな取り組みをチャレンジしようと立ち上がりました。

越後平野に住む人々は度重なる洪水被害に苦しんでいました。人々は江戸幕府へ分水工事を請願しましたが、工事の規模や予算から許可されることはありませんでした。明治時代になると大河津分水の建設工事が始まりましたが、人力での掘削作業では十分な川幅が確保できず、工事は中止されてしまいました。その矢先に越後平野を壊滅させた横田切れという大水害が発生。再び大河津分水の必要性が提唱され、大正時代にはドイツやイギリスから輸入した大型機械を駆使し、延1000万人といわれる人々が従事し、ついに1922年に通水しま

大河津分水を人々へ広める - 川に親しむ、川や地域に関心を持つ -

青山士の言葉が刻まれた石碑でミッションにチャレンジ

Love River Net における取り組み

大河津分水や信濃川などの川を通じて、人々が川に親しむ機会を提供するとともに、川が作り上げた郷土の素晴らしさや大切さに気付く事業を展開し、もって、次代を担う人材を育成することを目的とし、活動を展開しています。活動自体は、楽しく、緩く、長く、がモットーなので、アイデアが生まれれば基本的に実行し、イベントだけでなく、Love River カレンダー、堰クッキー、大河津分水タオル、洗堰・可動堰パズル、横田切れカレーなどの関連グッズ等を実現してきました。今後は、子ども達や地域の方々が大河津分水を通じた活動を展開してくれるようサポート役も目指しています。

した。その後も堰が陥没するなどの危機を青山士や宮本武之輔といった日本を代表する土木技術者の活躍で乗り越えて、今日の大河津分水があります。

大河津分水は、信濃川の水を分ける人工の川で、洗堰と可動堰の2つの堰を操作することで、洪水は大河津分水から日本海へ流し、下流域が必要な水だけを信濃川へ流して、越後平野を水害から守るとともに、越後平野を潤す役割を担っています。

大河津分水の恩恵は計り知れず、水害が激減し、米の収穫量は三倍となり「米どころ新潟」が誕生したばかりか、かつての水害常襲地帯には上越新幹線や北陸自動車道が縦貫し、世界有数の洋食器の産地が形成されています。

現在の大河津分水は国定公園の一部にもなっており、水辺の公園、資料館などのスポットも充実しています。ここを活動場所と出来ることはとても恵まれていると思います。

私たちLove River Netの活動のねらいは、川に親しむ、川や地域に関心を持つ、そして大河津分水を知ってもらうこと。様々な活動を通じて、大河津分水を発信してくれるファンを大勢つくりたいという思いで活動を続けています。

大河津分水も2022年には通水100年を迎えます。現在、通水100年を地域の様々な人々と祝うべく、学校教育と連携した分水サミットの開催や、地域行政と連携したインフラツーリズムの開催を目指しています。

主な活動

Love River Netの主な活動をご紹介します。

ミズベ遊びミズベBBQ

気軽に水辺に親しんでほしいという思いから、水辺でのバーベキューを企画し、火起こし体験や巻き割り体験をはじめ、ペットボトルロケット飛ばしや星空観察会を開催しました。初めて大河津分水へ足を運んでくださった方々が参加者の25%もおられ、良いきっかけ作りになりました。BBQでは地元燕市から紹介された地元のアウトドア企業から協力して頂けたのも成功した要因の一つだと思っています。

大河津分水サンクスフェスタ

今年で5回目を数えるこのイベントはLove River Netとつばめ若者会議が一緒に企画・運営する大河津分水感謝イベントです。新潟では知らない人はいないというラジオパーソナリティーの遠藤麻理さんとさとちんさんが出演する「みずべトークライブ」のほか、竹水鉄砲、凧づくり、水辺の生き物探検隊、Eボートでの水上大河津分水観察会等、水に親しむ盛りだくさんのイベントを開催しています。400人を超える来場者のほとんどがリピーターで地域のイベントして定着してきました。

ラブリバーウィーク

2週間限定の大河津分水カフェをはじめ、大河津分水が描かれた特性クッキーの試食、ミッションをクリアしながら進むウォーキング等を実施。一昨年はのべ391名の参加者にお越しいただきました。

つばめ若者会議

同じ志を持つ仲間を増やしたいと感じていたときに、燕市のつばめ若者会議へ誘っていただきました。つばめ若者会議では、燕市を楽しくしたいと思い、まちのために必要なこと、大切なことを創造し、主体的に動こうという気持ちを持った若者が集まり活動しています。燕市への思いがあれば、あまり若くなくても、市外在住でも参加できます。若者会議では幾つかのプロジェクトがあり、Love River Netの大きな活動の柱である「大河津分水サンクスフェスタ」開催にも協力いただいています。

このつばめ若者会議には実に様々な方が参加しています。情報交流は勿論、それぞれの強みを活かしながら、若者でもまちづくりに携われるこの制度は素晴らしいと感じました。

Love River Netの何人かのメンバーも、このつばめ若者会議

大河津分水を人々へ広める - 川に親しむ、川や地域に関心を持つ -

が縁で仲間となりました。

株式会社エコロジーサイエンスのサポート

Ｌｏｖｅ Ｒｉｖｅｒ Ｎｅｔを立ち上げる以前、縁あって信濃川大河津資料館勤務から、中越地震の教訓を伝えるために作られた「きおくみらい（正式名称は長岡震災アーカイブセンター）」に勤務していました。震災の教訓を伝えることは大切で興味深いものだったのですが、どうしても川が恋しくなり、将来を考えていたところ、株式会社エコロジーサイエンスの大谷内社長からオファーを受けたのです。大谷内社長は覚えていないかもしれませんが、「私は大河津分水に携わる活動をしたいので、それを続けてもよいなら行きます」とお伝えしました。

転職した頃の仕事は環境調査がメインでしたが、徐々に大河津分水に関連する業務が増え、知れば知るほど大河津分水の魅力を人々へ発信したいという思いが強くなりました。

【Ｌｏｖｅ Ｒｉｖｅｒ Ｎｅｔを現在もサポートしているのが株式会社エコロジーサイエンスです。会社の仕事の傍ら、様々な活動を精力的に行える恵まれた環境にあることでＬｏｖｅ Ｒｉｖｅｒ Ｎｅｔが素晴らしい活動を展開し続けている理由が見えてきました。その活動は今年の川づくり団体全国事例発表会でも高く評価され、優秀成果賞を受賞しています。

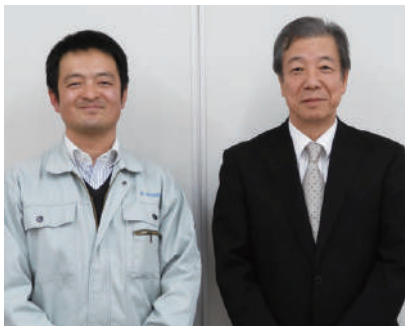
Ｌｏｖｅ Ｒｉｖｅｒ Ｎｅｔの支援を続ける大谷内さんにその理由を伺ってみました。

「私たちが今まで行っている生物関係の調査もＬｏｖｅ Ｒｉｖｅｒ Ｎｅｔの活動も関連性があります。地域のお子さんたち、お父さん、お母さんにも参加していただいて、共に川に親しんでいくことを大切にしてきました。地域のために役立てていることが一番ですが、不思議と業務へも繋がっていると感じています。」

聞けばＬｏｖｅ Ｒｉｖｅｒ Ｎｅｔの支援の外にも日本に来た留学生のサポートも進んで行われておられるとか。地元を良くしようと活動しているＬｏｖｅ Ｒｉｖｅｒ Ｎｅｔを支援し、地域貢献している企業という、まさに理想の形がここにはありました。】

今後の活動

当面の目標は２０２２年に迎える通水１００年に多くの方々から大河津分水を祝っていただくことです。先人たちの思いを繋ぎ、この宝物をどう後世へ引き継いでいけるのかを考えなければと思っています。そこで、大河津分水への関心と理解を深めてもらうためのインフラツーリズムの実施やその定着に着手し始めたところです。また、未来の担い手である子どもたちに大河津分水を学習してもらい、ゆくゆくは全国の放水路・分水路を学習する小学生同士の意見交換を行う「子ども分水サミット」の実現を目指しています。このような活動の展開には地域の協働が不可欠で、様々な地域団体の方々との意見交換会も企画しています。今まで以上につばめ若者会議のメンバーや大河津分水の管理者である信濃川河川事務所の皆様と連携しながら活動を展開していきます。



（写真右）
大谷内忠夫　Tadao OOYACHI

株式会社エコロジーサイエンス

（写真左）
樋口 勲　Isao HIGUCHI

Love River Net 代表

新潟県十日町市出身。
大学卒業後建設コンサルタント会社入社。
平成 13 年 11 月信濃川大河津資料館勤務。
平成 23 年 4 月より長岡震災アーカイブセンターきおくみらい勤務。
平成 24 年 11 月より建設コンサルタント会社勤務。
平成 26 年 11 月に Love River Net 立ち上げ。

信濃川大河津資料館勤務時代に川の素晴らしさに気づかされる。
以後、任意団体 Love River Net の活動等を通じて、水辺の生きもの観察会や川下り、川でものづくり、水辺コンサートなど、水辺イベントを多数企画。川巡りツアー、川の講演会、防災講座など講師多数。好きな言葉は「万象に天意を覚る者は幸いなり」。

学校近くの七北田川（万人淵）での体験学習の様子

INTERVIEW

河川基金助成の現場から

「地域の川『七北田川』を知ろう」で深い学びを実現

仙台市立北中山小学校（宮城県）

教諭　木村 千春 さん　　教諭　今野 友明 さん

カワラバン（宮城県）　代表　菅原 正徳 さん

先生と川の指導者の出会いから

仙台市立北中山小学校の七北田川をフィールドとした学習活動は、東日本大震災直後の平成23年度から始まりました。

当時の教務主任だった佐野先生が、校区内を流れる七北田川での学習活動を模索しているときに、仙台市の泉区中央市民センターの紹介で主に広瀬川を中心に活動していたNPO法人川に学ぶ体験活動協議会（通称：RAC）の川の指導者でもあるカワラバンの菅原さんとの出会いにより、七北田川での体験を通した学習が本格的にスタートしました。

七北田川を活用する学習は校外活動であり、活動資金の確保も課題となっていたところ、東日本大震災直後の河川基金の緊急助成事業「子どもたちを勇気づける緊急助成」の情報について菅原さんを通して知り助成申請を行った結果、学校には津波災害から避難転校してきた児童も在校していたこともあり、新規採択され活動資金の手当てが出来たことも活動を進める上での大きな要因となったと考えられます。

学校としては、その後、河川基金の助成制度を継続活用し、七北田川をフィールドとした体験学習が現在まで継続されてきています。

川学習を通した教育効果を実感

七北田川をフィールドとしたの学習活動は、主に3年生が総合的な学

「地域の川『七北田川』を知ろう」で深い学びを実現

七北田川の模型（上・中・下流）を使った川の生物の発表

仙台市立北中山小学校への取組

校区内を流れる七北田川をフィールドとした体験学習は、東日本大震災直後の平成23年度から3年生を主体として、総合的な学習の時間を活用しこれまで毎年度継続してきている。

活動の概要は、学校直下の中流（万人淵）の生き物や水質の調査等、さらに上流（源流のヒザ川）と下流（蒲生干潟）の現地での体験学習を通しての1年間の学習活動をまとめ、保護者や地域住民等を対象とした発表会を行っている。

習の時間を活用して行っています。

3年生になると社会科の地域学習で、市町村を対象とした学習となっていますが、新興住宅地に立地している北中山小学校では、児童にも分かりやすく実感しやすい身近に存在する七北田川を学習対象としたことが特質されます。

平成30年度の3年生を担任する木村先生によれば、身近な七北田川には、水の流れ、水質、河原の石、多様な生き物、上流や下流とのつながり、水の利用、地域の農業や暮らしとの関わりなど、多様で魅力ある学習素材があり、児童の興味・関心が高まる題材であることを再認識するとともに実感していますと話されていました。

3年生は、児童一人一人が夏前から七北田川での学習テーマを定め、総合的な学習の時間を活用し、主に菅原さんに外部講師（専門家として）をお願いし、学校近くの万人淵（広瀬河原）での生き物調査等の体験学習から始め、上流の泉ヶ岳ヒザ川（源流部の沢）、河口近くの蒲生干潟での体験学習を通して、新たな発見や驚きなどの感動、そこから自ら自分で決めたテーマや疑問等について図鑑などを使った調べ学習へと学習意欲（やる気）が、1年間を通して徐々に高まっていく様子が見られたとのことです。

学年末には、共通のテーマごとにグループをつくり、保護者や地域の人たちを招いて、1年間の学習の成果をまとめ発表します。

平成31年2月27日（水）に行われた発表会を参観させていただきました。3年生全員（3つの組の児童約100人）が30ほどのグループに分かれ、前半の部と後半の部に分かれ、保護者や他の児童に向けてポスター、リーフレット、工夫を凝らした模型、疑似体験できるセットなどを駆使して、3年生とは思えない素晴らしい発表を行っていたことが印象に残っています。

平成29年度に3年生を担任し、30年度に4年生の担任となった今野先生からは、4年生になり社会科や理科の中で水や生き物等に関連する単元を学習するところでは、3年生での七北田川の体験学習に結び付け、関連付けて学習することで、理解が早く学習効果が上がっていると話されていました。

さらに、4年生での学習発表会の様子を見ると、プレゼンテーションの質が高くなっていることが見られることと、人の話をよく聞く態度が身についていることが実感できると話されていました。

学校の教育活動として定着

北中山小学校では、七北田川をフィールドとした体験学習がスタートした平成23年度当時を知る先生は、平成30年度現在一人もいない状況となっていますが、学習活動はその後も毎年度継続されてきています。

3年生を担当する先生や学校長は、何人か交替していますが、木村先生や今野先生によれば、七北田川をフィールドとした3年生を主体とした体験学習は、児童の学習意欲の向上につながり教育効果も大きいとして引き継がれ、さらに、保護者にも認識され、活動時の協力支援もしてもらえる環境となってきていることから、学校の教育計画の中にしっかりと定着していることが伺えました。

児童数が多いため、1回の体験活動で豊かな経験をさせることが難しい。そこで、学習活動の充実を図れるよう用具や備品等をそろえるため

「地域の川『七北田川』を知ろう」で深い学びを実現

に河川基金を活用するとともに、交通費や指導謝金等の活動資金についても河川基金の助成制度を活用することで、保護者等からの新たな負担等をお願いする必要もないことから、河川基金の助成制度は大きなメリットがあるとして先生が交替しても、必ず引き継がされてきているとのことでした。

外部講師と学校現場の信頼関係の構築

毎年度継続して外部講師をお願いしている菅原さんは、仙台市を中心に多くの小学校や幼稚園等で、川を利活用した体験学習の支援を行っています。川の生き物の専門家であるとともに、RACの川の指導者として安全対策に関する知識とスキルを有していることから、学校現場の先生方の信頼も厚く継続した活動につながっていると考えられます。

このように、地域の市民団体等で川をフィールドとして活動している必要な知識と安全対策等のスキルを有する川の指導者と学校現場が連携する取組みが全国各地の河川に広がることができれば、「川に学ぶ社会」の再構築に向けて大きな役割を果たすと期待されるところです。

今後について

北中山小学校は、七北田川をフィールドとした体験学習活動を平成23年度から継続実施し、学校教育活動の主要な取組みとして定着し、地域や保護者からも3年生になったら体験学習ができるということが認知されている地域環境とともに、教育効果も大きいとのこれまでの実績から、平成30年度に新たに赴任された高山校長をはじめ取材した二人の先生方からは今後とも継続していきたいと話されていました。

この中で、今後は、総合的な学習の時間だけではなく、実際の学習活動の内容から国語、社会、理科などの教科とのクロスカリキュラムで実施することを考えていきたいとも話されていました。

さらに、過去にも実施した経験があるとのことで、3年生だけの一学年のみで実施している体験学習を複数学年で体系的に実施することを考えていきたいとも話されていました。

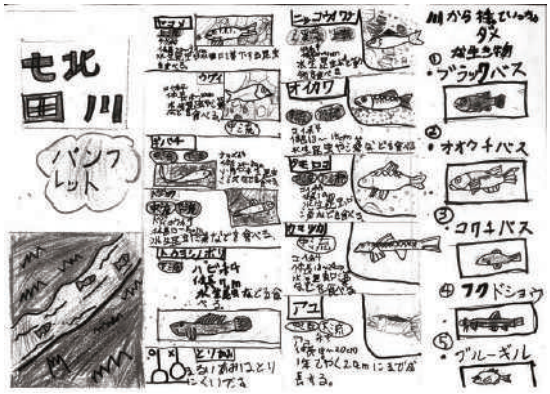
七北田川をフィールドとした体験学習を継続実践している北中山小学校を訪問し、活動現場（七北田川の万人淵）と発表会を見させていただきましたが、学校から万人淵までの子どもたちの徒歩移動を考えると、往路は下り坂で15～20分程度、復路は上り坂で25～30分と、アクセスにかなりハードな地理的・地形的な条件があると思われました。

しかし、このような条件があるにもかかわらず、活動現場に隣接する砕石事業者のトイレ等の利便施設の全面的な協力、先生方の熱意、カワラバンの菅原さんとの強固な連携関係が感じられ、七北田川をフィールドやテーマとした体験学習が今後も継続・実践されていくと強く感じられ、印象に残る取材となりました。

（写真右）
木村 千春　Chiharu KIMURA
仙台市立北中山小学校　教諭
平成 30 年度 3 年生担当教諭

（写真中）
今野 友明　Tomoaki KONNO
仙台市立北中山小学校　教諭
平成 29 年度 3 年生担当教諭

（写真左）
菅原　正徳　Masanori SUGAWARA
カワラバン　代表
平成 23 年度から外部講師を継続



児童が作成した「七北田川パンフレット」

INTERVIEW

河川基金助成の現場から

現場の問題解決が研究への原動力
- アユ産卵場の形成 -

高知工業高等専門学校（高知県）　准教授　岡田将治 さん

自作水中採水器の試験計測前の準備状況（高知県永瀬ダム）

河川基金応募の経緯

高知工業高等専門学校で教え始めて14年経つのですが、河川基金助成はその数年後からいただいています。

平成17年に母校である高知高専で教えるため高知へ戻った年に、四万十川で大規模な出水があり浸水被害など色々調査をしていました。当時テレビのデータ放送やスマホなどなかった時代で、水位の情報があれば早く避難できたのではないかと考えました。どうにか水位情報を住民の方々に伝えられないかを考え、水位情報をラジオで聞くことのできるシステムを思いつきました。インターネット上の水位データを音声に変え、ミニＦＭと特定小電力無線を組み合わせた自作の情報配信システムで流しました。被災した地域の住民には大変好評で、それが最初に基金助成をいただいたテーマです。

河川基金のように地域のテーマで応募できるのは大変ありがたいです。この助成を頂いたおかげで、地域で困っている課題を解決することができました。

実は、河川基金には当初は何回か落ちました。それでも応募し続けたら、いつからか助成をいただけ

現場の問題解決が研究への原動力 - アユ産卵場の形成 -

高知工業高等専門学校　准教授　岡田将治先生の取組み

国土交通省四国地方整備局のリバーカウンセラー（仁淀川、物部川、四万十川）を務め、水害の専門家としても活躍。今年度助成では「高知県四万十市を対象とした平成 30 年西日本豪雨災害時 における住民の防災情報の理解と活用に関する調査および災害リスクコミュニケーションの実践」ということで、西日本豪雨災害の教訓を活かした取組を行う。

岡田研究室の椅子に背もたれなんてありません。会議は立って、すみやかに、これが岡田研究室のスタイル。

るようになりました。おかげさまで、基金助成の優秀成果賞も５回いただいています。

「アユの産卵場」をサイエンスで解明

平成18年から四万十川のリバーカウンセラーをしており、流域の学識者会議の中で、どうすれば近年縮小しているアユの瀬を創出できるかという議題が必ずあがっていたので、どうにかできないかと思ったのがきっかけです。

河川事務所では様々な業務でかなりの予算と労力をかけて、河川のあらゆるデータを取っています。ただ、それぞれのデータが現場の課題の解決に直接結びついていない。結び付けられればもっと色々なことができるのにと常々思っていました。

また、地形データが少ないのが問題でした。河川事務所では河川の横断面形状は２００メートルピッチで測量・管理しているのですが、それですと、瀬がどこにどの程度の大きさで形成されているのかわからない。それを解決したのがドローンです。これまでもレーザープロファイラーで飛行機からデータを取っていましたが、お金もかかるため大きな河川ですら10年に1回程度です。細かい地形データがないと対象とするスケールの流れの計算ができません。ドローンが出てきて、四万十川で使ったらかなり細かい地形データが取れました。そのデータを使い流れの計算を行ったら、アユの産卵場がどういう条件の場所にできやすいかがわかってきました。

産卵場は河床がやわらかい瀬にできます。ただ今までは専門家の方が、産卵場ができる場所を抽象的な表現で伝えていました。人によっても表現の仕方が違いますし、計算により数値化し、サイエンスとして説明できたらと思いました。それが最初の目標で、数年測っていく中で、産卵場のできる場所が計算上わかるようになってきました。自然の営力を使ってアユの産卵場をどう作ればいいのか、それがわかれば先を見越した河川改修、河川整備ができるなと思いました。

研究者を志した経緯

高専の5年時にコンクリートの研究室に所属し、担当教員の母校である広島大学を紹介され、2年生に編入しました。大学3年生の時、たまたま今の恩師の紹介で、現在の国土技術政策総合研究所河川研究室にインターシップが決まり、つくばで水理実験漬けの夏休みを過ごしました。河川分野で著名な方がたくさんいらした中で過ごした1ヵ月半が楽しくて…。

即戦力の人材育成を目指す

高専の学生にいつも言っていることは、研究室を選ぶとき、専門にとらわれず自分が成長できると思う先生のところに行きなさいと。1年そこら勉強しても全てを理解するのは難しい、だったら自分の能力を伸ばしてくれる先生のところにというのが私の思いです。

毎年、研究室の配属先を決める説明会では、普通は教員が説明しますが、私は学生にさせています。研究の特徴、指導方針、私たちの研究室が大学等の研究機関、国土交通省や建設コンサルタントと一緒にどんな研究をしているか、その研究がいかに大変でやり甲斐があって自身が成長できるか、やる気があったらうちの研究室に来なさいと説明をさせています。毎年、教室内がざわつくそうです（笑）

卒業後、多くの学生が国土交通省や建設コンサルタントの河川部門に就職しています。学生時代に現場で鍛えられていますので、新人でも即戦力として頑張ってくれています。

現場の問題解決が研究への原動力 - アユ産卵場の形成 -

今後取り組みたい研究やテーマ

どこまでできるかわからないですが、とにかく色んな事をやってみたいです。現場の課題解決につながる研究がしたいです。常に研究テーマは10個ぐらいあって、学生には複数のテーマを並行して進めてもらっています。

今、勉強をしているのは、データ解析です。これから土木や河川の分野でもＡＩがさらに使われるようになってくるはずです。例えばドローンを飛ばすことによって川の航空写真から草木の種類や流況が判別できるなど、河川の情報量が増えることよって、色々な情報の組合せで研究が深化していくと考えています。

研究室にはこもらず、定期的に現場（川）に出ています。どこかで洪水があったら、学生と一緒にすぐ観測機器を携えて現場へ行きます。私たちは河川事務所からデータを頂きつつ、現場に出掛けて独自にデータを取っていますので、ほかとは違った研究ができます。常に現場を見ながら、問題意識を養い、そこで困っている人がなぜ困っているのか考えていると、また次の研究テーマが見えてきますし、学生のモチベーションを高めることもできます。

その土地や地域で何かしら問題は必ずあるので、それを解決できることに地方の大学や高専の価値がある。技術がないところで困っている方はたくさんいます。安く提供できる技術で、地域の課題解決に協力するということは大学ではなかなかできません。高専の研究者としてそういうことをきちんとやりなさいと恩師からもよく言われていて、それをいつも心がけています。

災害に対する意識の変化

先日も四万十市の高校で災害に関する講演をする機会があり、数年前だと南海地震、津波の話をしてくださいという依頼が多かったのが、最近は豪雨水害の話をしてくださいという風に変わってきました。

高校生の関心も地震だけでなく、より身近な水害に変化していると感じます。今後は、高専生が地元の高校生と一緒に水害リスクを教える地域住民向けワークショップを行って、生徒会活動などで各地域において継続的に受継がれる仕組み作りも進めていきたいです。

今後の河川基金へ

若手の研究者には自分のアイデアを形にして、発展をさせていくようなときに助成を受けてもらいたいです。特に地方の研究者は予算が本当にないですからね。助成をいただくとやらなければならない状況にもなるし、河川管理者や関連関係者との連携も必須なので、お付き合いの幅も広がっていくのがいいと思います。

岡田 将治　Shoji OKADA

高知工業高等専門学校 ソーシャルデザイン工学科 准教授

【学歴】
1989 年 4 月 - 1994 年 3 月　高知工業高等専門学校　土木工学科
1994 年 4 月 - 1997 年 3 月　広島大学 工学部 第四類 (建設系)
1997 年 4 月 - 2002 年 3 月　広島大学大学院 工学研究科 博士課程 環境工学専攻

【経歴】
2002 年 4 月 - 2003 年 3 月　広島大学大学院 工学研究科 助手
2003 年 4 月 - 2005 年 3 月　中央大学 理工学部土木工学科 助手
2005 年 4 月 - 2009 年 3 月　高知工業高等専門学校 建設システム工学科 助教授
2009 年 4 月 - 2016 年 3 月　高知工業高等専門学校 環境都市デザイン工学科 助教授

現在
高知工業高等専門学校 ソーシャルデザイン工学科 准教授
高知大学 防災推進センター 客員准教授
中央大学 研究開発機構 客員研究員

ご寄付の御礼

寄付者の皆様へ

平成 30 年 4 月 1 日から平成 31 年 3 月 31 日までの一年間に、「一般財団法人　宮崎大淀川スポーツセンター」や「釧路リバープロテクション 21 の会」、「前田建設工業株式会社様」をはじめとする、団体や個人の皆様から 2,198,203 円のご寄付をいただきました。寄付者の皆様に心より御礼申し上げます。

ご厚志につきましては、河川基金として管理し、その運用益を河川の治水・利水・環境に関する調査、川づくり団体の活動や学校での河川教育を支援する助成事業のために有効に使わせていただく所存でございます。

公益財団法人　河川財団
理事長　関　克己

寄付金の税法上の優遇措置について

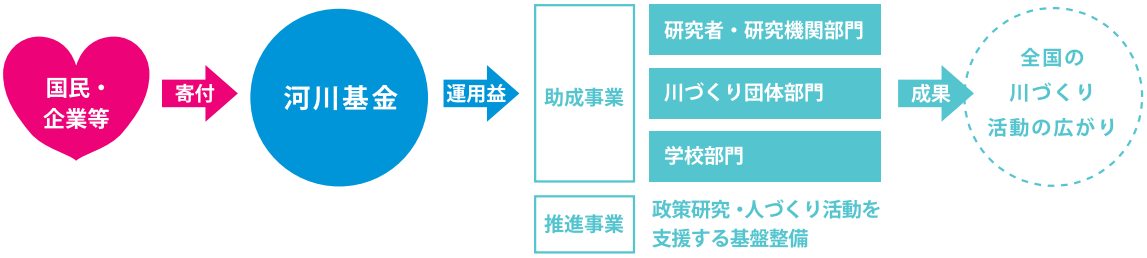
当財団は、内閣総理大臣より「公益財団法人 」としての認定を受けております（認定日は平成 25 年 3 月 21 日、法人登記日は同年 4 月 1 日）ので、当財団への寄付金には上記の河川基金への寄付金及び一般寄付金のいずれについても特定公益増進法人としての税法上の優遇措置が適用され、所得税（個人）・法人税（法人）の所得控除等が受けられます。

詳細は河川財団 HP をご覧下さい。

河川財団　検索

「河川基金」とは

昭和 63 年に河川財団（河川環境管理財団）に「河川整備基金」として設立。設立後 30 年近くを経過し、社会情勢の変化等に対応するため「河川基金」として新たなスタートを切っています。



数字で見る「河川基金」

助成件数
（昭和 63 年度～ 2019 年度）
約 **10,870** 件

助成総額
（昭和 63 年度～ 2019 年度）
約 **120** 億円

河川財団は、我が国の助成財団の中で、助成等事業費で上位 100 財団の 63 位（2017 年度）にランキングされています。

「日本の助成財団の現状」より
助成財団センター調べ
（有効回答数：1,784 団体）

助成等事業費
63 位

河川基金

河川基金ウェブサイトをご活用ください。

www.kasen.or.jp/kikin/

河川基金ウェブサイトでは、助成事業に関するイベント等の「活動告知ページ」及び「活動報告ページ」を設けております。助成を受けられている方はぜひご活用下さい。

【活用例】
- イベント等の活動告知
- イベント等のレポート
- 研究等の受賞報告

等

RIVER FUND
河川基金だより
2019年4月発行
Vol. 40
2019 April

河川財団が「紺綬褒章」公益団体として、内閣府より認定

河川財団は、内閣府（賞勲局）より「紺綬褒章」の公益団体認定（褒章条例ニ関スル内規 第2条）を受けました（平成29年6月28日付）。褒章の一つである「紺綬褒章」は、公益のため私財を寄付した方々（個人では500万円以上、法人では1,000万円以上）を対象としています。

平成29年6月28日以降、河川財団へのご寄付（河川基金への寄付または一般寄付）をいただいた方で上記条件を満たす場合には「紺綬褒章」の授与申請を致します。

紺綬褒章とは（内閣府HPより）

公益のために私財を寄附した者を対象とする紺綬褒章は、表彰されるべき事績の生じた都度、各府省等の推薦に基づき審査をし、授与を行っています。

国、地方公共団体又は公益団体（公益を目的とし、法人格を有し、公益の増進に著しく寄与する事業を行う団体であって、当該団体に関係の深い府省等の申請に基づき賞勲局が認定した団体）に対する寄附が授与の対象となります。

※地方公共団体等への寄附について、寄附者が当該寄附に対する返礼品（記念品の類を除く）を受領した場合は、紺綬褒章の対象となりません。

編集発行：公益財団法人 河川財団 基金事業部
本誌はホームページでもご覧になれます。http://www.kasen.or.jp

公益財団法人
河川財団

本部
〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町11-9 住友生命日本橋小伝馬町ビル(2F)
http://www.kasen.or.jp　E-mail:info@kasen.or.jp

本部
総務部　TEL:03-5847-8301　FAX:03-5847-8308
経営企画部　TEL:03-5847-8302　FAX:03-5847-8308
基金事業部　TEL:03-5847-8303　FAX:03-5847-8309
子どもの水辺サポートセンター　TEL:03-5847-8307　FAX:03-5847-8314
河川総合研究所（戦略的維持管理研究所）　TEL:03-5847-8304　FAX:03-5847-8310
東京事務所　TEL:03-5847-8306　FAX:03-5847-8310

名古屋事務所
〒463-0068 名古屋市守山区瀬古3丁目710番地
TEL052-388-7891　FAX052-388-7918
E-mail:info-n@nagoya.kasen.or.jp

近畿事務所
〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31（OMM13F）
TEL06-6942-2310　FAX06-6942-2118
E-mail:info-o@osaka.kasen.or.jp